

この堰は、川の流^{ちよくせん}れが直線^{きゆう}で急なため、洪水^{こうずい}のたびに流され、たいへんやっかいな堰^{せき}でした。土地^{おさ}を治める人^{じとう}(地頭)は、人々の苦^{くろう}勞をあわれんで毎年堰^あ揚げ(河川^{かせん}をせき止めて水のとり入れを

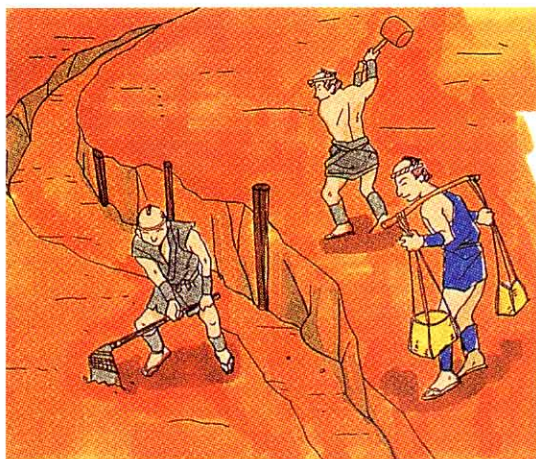


▲三貫堰

始めること)のたびに、経費^{けいひ}の一部^{せいとう}にと青銅^{せいとう}三貫目^{さんかんめ}を100年間もつづけてくれました。そのため、この堰^{さんかんせき}は「三貫堰」とよばれるようになったのです。

しんぼりせき
新堀堰

むかし、会津高田町^{みやかわ}では宮川^{みやがわ}の水を使って田^{たがや}を耕していました。しかし水の量^{りょう}が少なく、とくに宮川の西側^{がわ}の田に水を流すことがむずかしかったのです。それで、1770年、藤川の領家^{りょうけ}の南にある稲岡堤^{いなおかづみ}を水源^{おうだん}地とし、水のかれた宮川を横断^{おうだん}させて上町に流し、用水^{おうだん}としたり、かんがい用水^{かんがい}としました。



▲そのころの工事のようす

工事は、年寄りから若い人まで5~6000人の人夫^{にんぶ}の手でくわやもっこを使ったり、むしろをは張^はって水がもらないようにくふうし、三日三晩^{さんばん}かかりました。

いまでは、稲岡堤の水は使わなくなりました。そして、直せつ宮川からとりいれられるようになり堤^{はたら}の働きをしています。